



Title	臨床老年行動学講座を担当して
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1996, 1, p. 1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/12667">https://hdl.handle.net/11094/12667</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 臨床老年行動学講座を担当して

柏 木 哲 夫

月日の経つのは速いもので、大阪大学人間科学部に新しくできた「臨床老年行動学」講座を担当するようになって3年になる。これまでずっと病院が私の仕事場であったので、大学という組織に慣れるまで随分時間がかかった。今でもまだ戸惑うことがある。建物が「人」という文字の形になっているのはユニークで面白いのだが、方向音痴（かなりひどい）の私は階段を上り詰めた所でどちらに進むべきかまだ迷う。

3年経ってやっと講座の基礎作りができたように思っている。1995年度は教養部の廃止に伴って、2年次の学生も講座に配属され、スタッフ、院生、学生、研究生、職員を加えて総勢33名の大所帯になった。

「臨床老年行動学」という講座は日本の大学のなかで阪大にしかないユニークな講座である。文字通り英語にすると“Clinical Geriatric Behavioral Science”となるが、いろいろ調べてみたが、世界にも他の大学には見当たらない。そうすると、この講座は世界中でただ一つということになる。

人間科学部の中では「臨老」と呼ばれているが略語にするとますますわからなくなる。マスコミの取材のときには「老いと死」について、教育・研究するところと答えることにしているが、まさにその通りである。「老いと死」の研究の切り口はさまざま考えられるが、私はそれを「臨床的」ととらえたいと思っている。「老いと死」を例えば、思想的、哲学的にとらえることもできるが、私は人が実際に老い、死を迎える現場を教育や研究の場にしたと願っている。ホスピスという現場を学生さんに実際に見てもらうことが何よりの教育になると信じている。「臨床の場」で体験したことをどのように論文にまとめていくかはそれぞれの課題である。患者や家族との面接を通しての洞察も重要であろうし、アンケート調査での分析も大切である。卒論や修論の指導を通して発見することであるが、研究の方法論の選択に学生さんの持ち味が出るということである。これは良い悪いの問題ではなく「違い」の問題である。

着任当初から、「年報」を出したいと思っていた。創刊号が開講3年目になってしまったのは、いつに私の怠

慢のせいである。多くの人の文章に触れ、それぞれの「持ち味」の「違い」がとても興味深かった。それぞれ忙しい中、文を寄せて下さった一人一人に感謝したい。年報の作成にあたっては両山本助手、とくに恵子助手が頑張ってくれた。最後になったが心からの感謝を表したい。

1995年11月  
教授室にて